

博士論文要旨

学籍番号	1216002	氏名	武田 順子
論文題目	妊娠期から育児期における「女性とともにある」ケアのあり方に関する研究		
<p>目的：本研究の目的は、助産師が捉える女性へのケアの認識と女性の出産体験の双方から「女性とともにある」ケアの実際と課題を明らかにし、女性と助産師の関係性について追究することにより、妊娠期から育児期における「女性とともにある」ケアのあり方について検討することである。</p> <p>方法：本研究は3つの研究で構成する。研究1は、「女性とともにある」ケアとはどのようなケアであるかを助産師の視点から追究することを目指し、地域において妊娠期からのケアを行っている助産師への面接調査、および医療機関勤務助産師への質問紙調査により助産師自らが実践する女性へのケアの認識を明らかにした。研究2は、女性の出産体験の「語り」から、主観的体験を把握し、女性の視点から「女性とともにある」ケアの現状と課題を明らかにした。研究3は、助産師を対象としたワークショップを開催し「女性とともにある」ケアの実現・改善に向けた検討を行った。本研究の計画は、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文審査委員会の承認を得て実施した（承認年月：2017年10月, 29-A003D-2）。</p> <p>結果：【研究1】6名の助産師の女性へのケアの認識からは〔女性との出会いの機会を大切にする〕〔生活や成育歴からその人を捉える〕〔丸ごと受け止める〕〔女性の気持ちを聴く〕〔強みを捉えて関わる〕〔時期を逃さず関わる〕〔揺らぐ気持ちに寄り添い自己決定を支える〕〔母と子の最初の出会いを大切にする〕〔何となく気になる感覚から関心を寄せ続ける〕〔継続して関わる〕〔自分の考えを押し付けず母親の視点で考える〕等、22の実践の意図と大事にしている想いが見出された。個々の助産師が〈「母親となるあなた」を支援する〉〈「いつもあなたの応援団」という気持ちで母と子を守る〉等の実践の基盤となる想いと過去の経験、知識から女性への深い関心を寄せる姿が明らかとなった。また、医療機関勤務助産師は、“生と死”に向き合う現場の中で、女性の一生を見据えた幅広い視野で女性を理解し尊重したいと願いつつも、人員不足や煩雑な業務で女性に十分に寄り添えない現状があった。【研究2】出産体験を語る集いに参加した8名の体験からは、女性ひとり一人の想いがあり、揺れ動くこころと変化する生活の中で〔新たなアイデンティティ形成に向けての変化〕に葛藤する姿や、分娩期に〔先のみえない不安と恐怖のなかで置き去りにされた心〕、育児期に〔母親としての役割の大きさと不安・孤独感〕を乗り越え自分なりの方法を見出し子どもや夫、家族との関係を築き直しながら生活する体験が語られた。また、助産師の存在は十分に認識されていない現状が明らかとなった。【研究3】参加助産師5名が考える「女性とともにある」ケアとしては〔一人じゃないと思えるように女性に寄り添い味方である〕等の7項目が見出された。</p> <p>考察：「女性とともにある」ケアとは、女性と助産師が継続的な関係において揺れ動くこころの体験を分かち合いながら目指す出産育児に向かっていくこと、その過程で女性の変容を見守ることであり、さらには「女性の声を聴く」「変化していく女性の力を感じる」ことで助産師自身も成長していくことが可能な女性と助産師との相互の関係であると考えられた。</p> <p>「女性とともにある」ケアのあり方としては、最初の出会いを大切にし、女性の話を聴き、生活の中で女性の体験を知り、関心を寄せてその人を“わかる”、継続的な対話によりこころの体験を理解する、不確かさを容認しながら意思決定を支える、母と子の最初の出会いを大事にすることが重要である。また、人と人をつなぎ関係性の中で女性の気持ちを尊重する、次世代を見据えてリプロダクティブヘルスを支える、自己の内省により自分を知るとともに、経験から学び続け、基盤となる助産観を深めていくことが重要であると考えられる。</p>			

(別記様式7)

番 号 :
平成31年2月19日

平成30年度博士論文審査結果報告書

主 査	奥村美奈子
副 査	北山三津子
副 査	服部 律子

平成30年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、下記のとおりです。

記

学籍番号：1216002

氏 名：武田 順子

審査結果： ○ 1. 合格 2. 不合格 3. 保留

[審査結果要旨]

(1,000字以内)

論文題目「妊娠期から育児期における『女性とともにある』ケアのあり方に関する研究」は、女性へのケアに関する助産師の認識と女性の出産体験から助産師のケアの実際と課題を明確にして、妊娠期から育児期における女性とともにあるケアのあり方を探究した研究である。

第一に、女性へのケアに関する助産師の認識を捉えるために、自治体に勤務する助産師に面接するとともに、A県内の医療施設に勤務する助産師に質問紙調査を実施した。女性へのケアの意図と大事にしている想いは、「女性との出会いの機会を大切にする」「妊娠期から時間をかけて関係性を築く」「何となく気になる感覚をキャッチして関心を寄せ続ける」等であり、医療施設においては、女性の一生を見据えて女性を理解し尊重したいと願いつつもできない現状が明確になった。第二に、出産体験の「語り」から助産師のケアの現状と課題を検討するために、出産後の女性から妊娠・分娩・育児期の体験を聞き取った。その結果、女性はそれぞれ、身体的な変化とともに心や家族との関係等様々な変化に対応しながら、母親としての自分を築き直しており、この時期に主観的な体験を聴き、情緒面での支援が必要であると考えられた。第三に、周産期支援に関わる助産師を対象としたワークショップを開催し、第一・二の結果を共有して、女性とともにあるケア実現に向けての方策を検討した。その結果、助産師は妊娠期からの継続的なケアが必要と感じ、女性の話を聴いて一緒に考え、産後早期に家庭訪問等により個々のニーズに対応する必要があると考えていた。以上を通じて、関心を寄せて女性の経験を聴き、その人をわかること、継続的な対話により心の体験を理解すること、不確かさを容認しながら意思決定を支えること、母と子の最初の出会いを大事にすることが女性とともにあるケアのあり方であると導いた。

これらの過程は的確にデータ化され論述されており、妊娠期から育児期における女性とともにあるケアのあり方に関する研究として高く評価できる。審査委員会では、これらの取り組みは本研究科の倫理基準に基づいて実施されており、論旨が明確で一貫性があり、博士論文審査基準に適合するものであることを確認した。当該学生は審査委員会に5回出席し、主査・副査からの質問に答え、かつ直接指導を受け、最終試験に合格した。以上のことから、本論文は博士論文として価値あるものと認める。